

新 著 紹 介 Review.

古畑正秋著：大圈圖法による肉眼恒星圖

この星圖は、大圈圖法(球心投影圖法)によつて描かれた星圖で、元來流星觀測用として使用さるべきものである。北天六枚、赤道部六枚、南天六枚計十八枚で一組になつてゐる。夫々赤緯北60度、赤道、赤緯南60度が圖の中心をなしてゐる。赤經は60度毎で中心經度は、夫々40°, 100°, 160°, 220°, 280°, 340°, を使用されてゐる。主要流星群の觀測はなるべく一枚の星圖で間に合はせる意圖から、星圖の範圍は相當に廣く、赤道部を例にとれば、隣の星圖と經度で40度も重複し、緯度では22°乃至35°(中央部は多く重なる爲)重複してゐる。

記入の星は5.0等級以上のものを入れ、-1等までを1等級毎に區別してゐる。分點は1950年を使用されてゐる。

二度刷にしてあつて、黒で經緯線、經緯度(經度は10°毎であるが)、星座境界線(1930年天文同盟決定のもの)、國際的に使用されてある星座名略符を入れ、赤で星名及星座邦名、赤經(時間法によるもの)、黃道(實線使用)、銀河赤道(破線使用)を記入してゐる。

星霧及星團は肉眼で認め得るもののみを入れ、變星は變光範圍が1等級以上のものだけ二重圓にして、極大極小の大きさを示してある。

印刷も極めて鮮明、用紙も相當厚手のよいものを使用されてゐる。元來流星用のものであつても、之をアトラスに製本すれば、他の研究用に使用して立派なものと思ふ。

星座の邦名は全部字音假名遣をされてゐる點は、著者の意圖を知らないので評は出来ないが、國民學校初等科卷二の50頁及76頁にあるものが正しく歴史的假名遣を使用してゐる點から、一寸行きすぎの感もあつて淋しい。固有名詞は全部片假名、他は平假名を使用されてゐる。たゞ第七圖で水瓶を“みずがめ”とし、第十二圖では“みづがめ”になつてゐるし、鯨が第七圖第十二圖や第十八圖では“くぢら”とかき、第十三圖では“くじら”になつてゐる點に訛謬がのこつてゐる。兎に角、流星圖としては最優秀のものであるといへる。

發行は東京都神田の葦牙書房でなされ、定價は一組參圓五拾錢となつてゐる。流星用として平常用ひる爲にはいささか高價であるから、實際觀測者には用紙と印刷(黒の一度刷にする)で廉額に供給される事と思ふ。(小横)